Osaka University Knowledge Archive

Title	『癇癖談』をめぐって : その重層構造を中心に
Author(s)	姜, 錫元
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1989, 23, p. 13-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47870
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『癇癖談』をめぐって

――その重層構造を中心に――

姜　錫　元

一

『癇癖談』の従来の範疇規定は、早くは木村黙老の『京摂戯作者考』「剪枝畸人」の項目に、「近頃癖物語といふ、滑稽本をも出せり」とあり、三沢諄治郎氏も、「上田秋成の癇癖談は、これを「くせものがたり」と訓ませる一種の滑稽短編集である」(1)と述べておられる。また、浅野三平氏も、『日本古典文学大辞典』の解説で、「癇癖談（くせものがたり）　二巻二冊。滑稽本」と述べておられる。ところが、随筆（神藤豊、「上田秋成「癇癖談」談義」、『古典研究』、昭和十六年五月号所収）、諷刺小説（浅野三平、「三つの諷刺的作品――書初機嫌海・癇癖談・万匂集――」、『国文学解釈と鑑賞』、昭和三十三年六月号所収）という規定もある。

問題点を整理してみる。浅野氏は同一作品に対して、「滑稽本」、「諷刺小説」といった二種の規定をしておられる。勿論、滑稽の中には「うがち」の性格があり、諷刺小説と規定される場合もあろうが、このように同一作品

に対して二種の規定があるということは、それほど『癇癖談』の性格は、一言で言えない複雑なものがあるということになるだろう。また、書名についても「くせものがたり」か、「癇癖談（かんぺきだん）」のどちらに読むかの問題が解決されていない。

では、『癇癖談』には、どうして範疇及び書名の揺れが見えるのか。それは作者秋成の秘められた作意による結果と考えられる。本稿では、右の問題を含めて、同書における秋成の創作態度を明らかにしたいと思う。

二

『癇癖談』は、「くせものがたり」という書名、「むかしをとこありけり」と始まる行文及び文辞、それから一部の類似したストーリーの段などから『伊勢物語』をもじった作品であるということは周知の事実である。本章では、今まで指摘されなかったいくつかの段を中心に両作品の関係を再考したい。

先ず『癇癖談』第十四段[2]から考えてみる。同段は、「人のおもひものなるをんな」の話で、彼女は「たちぬふわざよりして、（中略）なにわざにも、なみなみならざりけ」る女であるが、「そのたのみつる人」は「道々のあはれをも知らず、（中略）露もものこころなき人」であるので、女から「よろづおとしめられ」る。女は「まめまめしくいひかたらふべくもあらず、いとたのもしげなく、年月おもひくら」す。その上、「このあるじのやどの妻」は、「心さがなくて、」女に「つらさのみおもひしらせ」たので、女は「つひに髪をきりて、」尼となる。これからの話は、女は尼になったが、「師とたのみたる尼」の冷遇に堪えられなかったので、「此の庵室」からも逃れ、ついに尼出身の遊女になり、最後は「何がしの院の、把針者」となったという筋である。

さて、同段の前半部の話、即ち女が尼になるまでの話は、『伊勢物語』の第四十七段と第六十段とを下敷きにして構成したものと考えられる。即ち、『伊勢物語』第四十七段には、「むかし、男、ねむごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞きて、つれなさのみまさりつつ」[3]とあって、『癇癖談』の女の男に対する態度に似ているし、また『伊勢物語』第六十段には、「むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。」とあって、男と女との疎遠な関係が描かれているばかりでなく、女が男のところから逃れる場面があり、また同段の最後に、男の歌を聞いた女が「思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。」とあって、尼となった女の不幸な人生が描かれている。従って『癇癖談』第十四段は、『伊勢物語』第四十七段と第六十段とをアレンジして作ったものと見てよいであろう。

次は、『癇癖談』第十六段について考えてみる。同段は、「歌よくよむ翁」が自分の和歌の撰集を作ろうと思って、「住よしの神にまうでて「此の事冥加あらせたまへ」といのりもの」し、「其の夜の夢に」神の「妙なる御声」を聞いて作ったが、神の「なんぢつけ明らかなり」といった「御ンつげ」を「なんぢ、月あきらかなり」と聞き間違って作ったので失敗したという話である。

さて、同段の背景は、『伊勢物語』第百十七段、「むかし、帝、住吉に行幸し給ひけり。（歌、省略）御神、現形し給ひて、」であると考えられる。

最後に、『癇癖談』第二十五段について考えてみる。同段は、「深草のさとに、世を倦じてや住家もとめて、かくれたる人」の話であるが、これは秋成自身の心境を吐露した段として知られている。

さて、同段については『伊勢物語』第百二段と第百二十四段とを下敷きにしたと考えられる。即ち、『伊勢物語』

第百二段には、「むかし、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。あてなる女の尼になりて、世の中を思ひ倦んじて京にもあらず、はるかなる山里に住みけり。」とあって、『癇癖談』の同段と同じ設定を見せているし、「歌はよまざりけれど」は、『伊勢物語』第百二十四段の歌「思ふことといはでぞただに止みぬべき我とひとしき人しなければ」と共に、『癇癖談』の「我をたふとしとはおもひあがらねど、世の人はみなにごれるものにする、こころ奢のひと」といった秋成の心境の描写につながるものなのである。言い替えれば、「歌はよまざりけれど」と「我をたふとしとはおもひあがらねど」とは、ともに主人公のことをわざと反対に述べた逆説的表現であり、「我とひとしき人しなければ」と「世の人はみなにごれるものにする、こころ奢のひと」とは、ともに主人公の実際の高慢な心境を述べた表現なのである。そして、「深草のさと」といった地理的背景は、秋成の隠棲（『癇癖談』は彼の隠棲中著わされた）の地が大阪近郊の淡路庄村であったことを考えると、これも『伊勢物語』第百二十四段の前の段（百二十三段）の、「深草に住みける女」「いとど深草野とやなりなむ」などを用いたものと考えられる。(4)

一方、ここで注目したいことは、『伊勢物語』第百二十四段に対する秋成の態度であって、それは『よしやあしや』によく現われている。同書は、秋成が、賀茂真淵の『伊勢物語』注釈書である『伊勢物語古意』の校訂刊行（寛政五年）の際、それに付刻した自分の『伊勢物語』注釈書であるが、秋成はそこで、今までの契沖及び真淵の説に対する肯定的態度を変えて、次のようにより積極的に解釈しているのである。

（前略）此比見し或人の説に、作者此條にいたりて、己が下情を見せたるよといへるぞ、かねておもひしにか

なへるもの故、猶云はん、此條をしも終焉の條の前に出せしは、實に記者の意をあらはせるなるべし、(5)

即ち、秋成は『伊勢物語』第百二十四段が、「終焉の條の前」に出たのは「記者（作者）の意」を現わしたものであると評価しているし、そのような考えは「かねて」からのものと述べているのである。従って、これは第二十五段を『癇癖談』の最終段にした趣向と一致するものと考えてよい。

ここで従来の研究成果をも踏まえて両作品の関係を一覧表にしておく（枚数の加減で段数の対応だけにとどめた）。

癇癖談	伊勢物語
序・2	初
11	6
13	23
21	44
14	47・60
22	67・68
20	69
25	102
16	117
25	123・124

これを見ると、『癇癖談』は『伊勢物語』の行文・文辞・ストーリーばかりでなく、構成（段の順序）においても、一部の段が前後して現われてはいるものの、殆ど一致していることを知る。

三

『癇癖談』の正式の書名は何であろうか。いままで述べたところから見るかぎり、それは「くせものがたり」と見てよい。また、版本（文政五壬午歳七月刊）の題簽にも、上下とも「くせものがたり」とあり、版本に付刻している竹窓の書簡にも、「御うはさのくせものがたり」とあって、一応はこう考えられる。しかし、題簽とは別に内

題には、「癇癖談上」「癇癖談下」、上巻末に「癇癖談上畢」とあり、下巻末にはない。

ここに書名の揺れが起因し、現在に至るまで、書名をめぐっての様々な論議が行なわれてきたのである。三沢諄治郎氏は、同書の書名について、

「くせものがたり」
- (イ)「くせもの」がたり。(変人の世評談)
- (ロ)「くせ」ものがたり。(珍癖をあつめた説話集)

という構造を考えられ、「(イ)と(ロ)とを懸けて「くせものがたり」と命名したところに作者の趣向がある」[6]と述べておられる。一方、浅野三平氏は、「板本の内題に、「癇癖談」とある以上、書誌的には、この草紙の名は「癇癖談」と言うのが正しい。」[7]と述べておられる。

この問題は、同書の刊行が作者秋成の死後十三年後行なわれたところに、解決の難しさがある。ところが、秋成は「かのくせ物語、橋本より御とりよせ密々御校訂たのみ入、」[8]と、同書の書名について「くせ物語」と述べたことがある。しかし、これについても、前述の竹窓の書簡から見られるように、当時の同書に対する「うはさ」の書名を、秋成もそのまま使ったと見ることができる。勿論、ここの「うはさ」とは「世評の高い」という意味であるが、その「くせものがたり」がそのまま正式の書名とは言いがたいし、竹窓も秋成も「世間で呼ばれている」「うはさ」の書名、言い替えれば、別の書名(「別の書名」という表現は、後で引用する『よしやあしや』の「別號」という言葉に対応させるためである)を使った可能性も排除できないのである。やはりこの問題は、秋成が、「癇癖(かんぺき)

談を、癖ものがたりとも、よめばよめかし」（第一段）、「かんぺき談とも、くせものがたりとも、何ともかとも、あらうつつなの世がたりや」（第二十五段）と、自ら書名について述べている版本の文辞を中心に再考すべきではないだろうか。

第一段の「癇癖談を、癖ものがたりとも、よめばよめかし」について、「癇癖談の三字「くせものがたり」と訓ぜしむ」（『上田秋成全集』第一の「緒言」）、「癇癖談と書いて「くせものがたり」と讀ませる」（丸山季夫、「「くせものがたり」（癇癖談）について」『古典文庫』第四十八冊所収）などと、解釈する見方もある。しかし、第二十五段の叙述内容と見較べた時、そう見るのは一面的であろう。秋成は、「かんぺき談」「くせものがたり」と、複数の書名を述べているのである。言い替えれば、両者は異なる書名であって、書名の二重構造をもともと目指しているようだ。

では、秋成はどうして書名に二重性を持たせたのであろうか。秋成は『よしやあしや』で『伊勢物語』の書名について次のように述べている。

> 此物語の題、故は在五中將物語といひけんが、伊勢物語とはしばらく後なる人の、別號にや稱出つらんとおぼゆるなり、（中略）伊勢の國へ狩の使にいきけるに、齊宮なりける人と密事有し物語を、いともはかなげに作りなせしがおもしろしとて、伊勢物語ともいひはやしつらんを、後には在五物がたりてふ名は忘れにて、いふ人もなくなん成にたるを憶ふに、

即ち、『伊勢物語』の本来の題は「在五中将物語」であるが、「伊勢の国へ狩の使」の段の面白さゆえに「伊勢物

語」という「別號」になったと見ているのである。

しかし、『伊勢物語』の書名については、既に中世から様々な説があり、契沖の『勢語臆断』や賀茂真淵の『伊勢物語古意』にも取り上げられた問題であって、決して秋成固有のものではないことは言うまでもない。が、秋成は『伊勢物語』の書名について、格別な見解を見せている。

それは、前でも述べたことであるが、『伊勢物語』第百二十四段に対する秋成の態度である。秋成は『よしやあしや』で、前に引用した部分に続いて、次のように述べている。

凡物學びて才ある人の時にあはぬは、我有二寶劒一といひ、（中略）或は書は憤りになるとも云、（中略）それ作り出る人の心は、身幸ひなきを歎くより、世をもいきどほりては、昔を戀しのび、（中略）たゞ今の世の聞えをはゞかりて、むかし〳〵の跡なし言に、何の罪なげなる物がたりして書つゞくるなん、かゝるふみの心しらひなりける、このふみも在五中將ならぬ在五物がたりして、それにかこつけつゝ、世のさまのあまりにたはけたるをいひ刺しれるにも、猶おのが思ふかたはしだにおそりて、打いづべからぬには、ふみの終に、我に等しき人なきてふ打ほこりたるなげきせしこそ、おのが心をもなぐさめ、かつは命やしなふざえ人のしわざなれとおぼゆ

即ち、『伊勢物語』は、才学のある人が時に会わなかったところで、「身幸ひなきを歎くより、世をもいきどほりて」「今の世の聞えをはゞかりて、むかし〳〵の跡なし言に、（中略）かこつけて」書いた「在五中将ならぬ在五物がたり」だと見ているのである。

次は、同じ脈絡から『栄花物語』に対する秋成の態度を見ることにする。『伊勢物語』同様、『栄花物語』の書名についても秋成以前から様々な説があったことは周知の事実である。これについては、賀茂真淵の説と対比して考えてみる。

栄花物語は時のありさまを見きゝ或は他人の日記などをも書入たれば実の事なるをしばらく物語とはなづけたるなりけりかゝれば是をおきて餘はそらごと物がたり也　（『伊勢物語古意』[9]）

ひとり栄花物語こそ日記の体なるを、しか名づけし事のいぶかしさよ、思ふに是はおのが上にはあらねど、實に世に有し事どもを書あらはしたるが、時をはゞかりて書の題ばかり、そら言のためしなる物がたりとはかいつけしにやあらん、（『よしやあしや』）

以上の比較からも分るように、秋成は真淵より積極的な態度で『栄花物語』の性格を述べている。即ち、真淵は、『栄花物語』は「実の事なるをしばらく物語とはなづけた」と見ているが、秋成は、「時をはゞかりて書の題ばかり、そら言のためしなる物がたり」と韜晦の姿勢と見ているのである。

以上の二点をまとめてみると、

①『伊勢物語』……「今の世の聞えをはゞかりて、むかし〳〵の跡なし言に、」かこつけて書いたもの……本来の書名は『在五中将物語』

②『栄花物語』……「時をはゞかりて書の題ばかり、そら言のためしなる物がたり」……本来の書名は『栄花日記』

という図式が考えられる。これを見ると、両作品ともに世を憚って作品の趣向を変えたことが一致している。そして両作品ともに書名に二重構造を持っているのが分り、特に『栄花物語』の書名に対する秋成の見解は注目すべきだろう。

今、以上の秋成の『伊勢物語』及び『栄花物語』観と、秋成が当作品を構成的にも『伊勢物語』を模倣したことを併せ考えてみると、秋成も、世に憚ることがあって、書名の二重構造を用いたと言えるのではないだろうか。それでは、『癇癖談』の著述において、秋成が憚ったこととは何だろうか。

版本に付刻している竹窓の書簡に、「天王寺の法師がくすしの条、物産老人の類尽し、屈江書家のくだり、其の人々を見るやうにて、あかずくりかへし見申候。」とある。ここからも推察できるように、『癇癖談』には、実在の人物を取り扱ったという、所謂「モデル」の問題があったのである。その上、ここに登場する多くの人は、当時の著名の士であって、竹窓のような秋成の「洒落社中」には、「あかずくりかへし見」た面白い作品であったかも知れないが、当事者には容認できない作品であったのだろう。

秋成の作品におけるモデルの問題は『癇癖談』に限るものではなく、彼の処女作である浮世草子『諸道聴耳世間猿』（明和三年刊）から、晩年の『胆大小心録』に至るまでの問題であり、このモデルの追求については、中村幸彦氏の詳しい論証もある。[10] 特に『諸道聴耳世間猿』におけるモデルの問題については、同書の刊行から三十六年後の享和二年、社会問題になったこともあるのである。[11]

一方、モデルの問題と関連して、刊行の遅延した原因についても考えてみる必要がある。三沢諄治郎氏は、「当時社会的な地位名望のある人物について余りはっきり描き過ぎて差しさわりになる所があったために（その事は竹

窓の書簡にも明言している。）なかなか本屋が引きうけて呉れなかったと解するのが常識的であろう。」[12] と述べておられるが、賛同すべき説だと思う。「中はら大兄」あての書簡で秋成は、「貧ぼう隠者の紙墨料よろしくあきなひたまはれかし」と述べており、従って刊行の遅延は、秋成の意でなかったことが分る。『癇癖談』の脱稿を前にして、時事諷刺の黄表紙絶版を命ぜられたものが多く（寛政元年）、図書出版の検閲を厳にし、洒落本の版行の禁止（同二年）、洒落本の出版により京伝の筆禍（同三年）等、当時の出版界の厳しい事情を勘案すれば、やはり同書の刊行の遅延は、モデルの問題にその原因があったと見るべきであろう。

『癇癖談』は、以上のような「今の世の聞えをはゞか」った事情があって、書名に二重性を持たせたことであるし、またそれは、秋成が考えた『伊勢物語』の作品的性格と趣向を同じくするものであった。そして、秋成は書名の二重構造によって、自分の癖である「癇癖」を表わす場、即ち『癇癖談』を用意することができたのである。こういう秋成の意図は、「今の世の人は、心辞のくせの外にも、」云々と、人の癖について述べた後、「みづからは癇症とのがるるを、」（第一段）云々と、自分の癖を登場させ、初めから『癇癖談』の出現を予告していたところからも分る。

以上によって『癇癖談』は、『在五中将物語』が、「伊勢の国へ狩の使」の段の面白さゆえに『伊勢物語』という「別號」として読まれるようになったことと同じく、「今の世の人」の癖を面白く描いたところから『くせものがたり』という別の書名として読まれるようになった。そしてそれは秋成の構想によるものであったと考えてよいだろう。

四

では、秋成が「伊勢」をもじって「くせ」にし、書名の二重構造という彼の『伊勢物語』観に照応して『癇癖談』にしたと、一応考えられるとして、「くせ」の中から特に「癇癖」を取り上げようとした、その発想は、どこから生じたのであろうか。この問題は秋成個人の性格、「癇癖」と結びつくであろう。その点を本作の作者名の問題から考えてみたい。

『癇癖談』（版本）には作者名が記されていない。それは、「作者はたれともしるさざれど、つたへていふは、在郷の中将とかや。」（序）と、作者自身が初めから断わっているからである。版本に竹窓の書簡を付刻した理由も、「上田翁の御もとへ申参る」といった竹窓の文を通して、間接的方法ではあるが、同書が秋成の著であることを知らせる意図であったのだろう。

作者名が記されないのは、近世の戯作における一つの特徴とも言える。が、秋成の場合は違っていた。『諸道聴耳世間猿』（和訳太郎）、『世間妾形気』（和氏訳太郎）、『雨月物語』（剪枝畸人）、『書初機嫌海』（洛外半狂人）など、『癇癖談』以前の作品には、いずれも秋成の戯名が記されている。

では、秋成はどうして『癇癖談』に作者名を記さなかったのであろうか。が、秋成は作者名を述べなかった訳でもない。前述した「在郷の中将とかや」と述べたのが、それである。このように作者名をぼかし、「在郷の中将」という人物を前面に立てたため、『癇癖談』には初めから自分の名前を記すことができなかったし、また記す必要もなかったかも知れない。

では、秋成はどうして在郷の中将を作者に立てたのであろうか。在郷の中将は、在原業平の別称、在五中将のもじりだということは、言うまでもない。そして、業平は『伊勢物語』の作者として、平安末期から信じられてきた人である。従って、『伊勢物語』をもじった『癇癖談』であるから、作者名も同じ趣向を取ったと言って不思議でない。

が、ここで重要なことは、表面的な在郷の中将と言った作者名のもじりの問題ではなく、その裏に秘められる作者秋成の構想である。周知の如く、『伊勢物語』における業平著作説は、中世においても一般的な見解であった。それが、片桐洋一氏も述べられたように、「江戸時代も中期に近づくと契沖（『勢語臆断』）・荷田春満（『伊勢物語童子問』）・賀茂真淵（『伊勢物語古意』）などは烈しい口調でこれを否定し、結局作者不明ということになってしまったのである。[13]」秋成の『伊勢物語』観もこのような流れにあり、特に真淵の『伊勢物語古意』は、彼の『よしやあしや』の源流といってもよいものであった。

秋成は『よしやあしや』で業平について述べてはいるが、業平が『伊勢物語』の作者とは言っていない。別に、「記者」という名称を使っている。これは、『伊勢物語古意』の「物語のそら言は記者の文の妙をこそめづれ」と一脈相通ずるものである。ここに前述の、書名と同様な作者名の二重構造があり、秋成の作意が存在すると見るべきである。

㋑『伊勢物語』……「記者」
㋺『癇癖談』……記者（秋成）

という図式が考えられる。即ち、『癇癖談』に作者名が記されていないのは、このような『伊勢物語』の作品の性

格に追従したのであり、また、その二重構造によって、秋成は「身幸ひなきを歎くより、世をもいきどほりて」筆を執った「記者」のような境涯を追体験することができたのである。こうして、『くせものがたり』と『癇癖談』の二重物語を構築できたのである。

ここで、『癇癖談』の挿絵についても触れておきたい。同書には、二十の挿絵がある。その内、第十一段と第十三段の挿絵は、見たところですぐ各々『伊勢物語』の第六段（芥河）と第二十三段（高安の里）の挿絵を滑稽化したものであると分る。また、第十六段と第二十二段のは、各々『伊勢物語』の第百十七段（住吉大社）と第六十七段（花の林）の挿絵を思わせるものである。

『癇癖談』は挿絵においても『伊勢物語』を意識して絵画化しているものであった。こうなると、「本文にふさわしい」[14]絵を描き出した絵師嘉言についても一考を要する。

絵師村田嘉言は国学者村田春門の長子で、和歌や画を能くした大阪の人である。彼の撰した『新紅蘆和哥集類題』（二冊、京都大学蔵）には、秋成の歌もかなり収められているので、生涯秋成との関係をうかがわせる。特に、『国学人物志』（安政六年版、『近世人名録集成』所収）には、「摂津国」の項目に「秋成大坂上田東作」とあり、同じ頁の下段に「嘉言生玉村田七郎」と並んで記されているのが注目される。また、彼の傑作とも言える『女四書芸文図会』（四冊、京都大学蔵）には、『癇癖談』の挿絵を思わせる共通した絵柄が数多見られる。

五

『癇癖談』には二つの世界が共存している。一つは「くせものがたり」の世界であり、もう一つは「かんぺきだん」の世界である。「くせものがたり」の世界は、『伊勢物語』の「みやび」「まこと」の世界を、「ひなび」「いつわり」の世界に俗化した「哄笑」の世界であり、同書が滑稽本としても規定される所以もそこにあろう。「かんぺきだん」の世界は『在五中将物語』の「記者」の「憤り」を追体験した「冷笑」の世界であり、それによって同書が諷刺小説としても規定されていると思う。『癇癖談』の面白さは、この二つの世界がうまく入り交じりながら笑いを演出しているところにあり、それは「ざえ人（秋成）のしわざ（構想）」によるものであった。その二つの世界を描ききる為に、秋成は、書名と作者名とに、二重構造を用いたのである。

『癇癖談』の序で、秋成は「当粋（あてずい）なかしら書して、おのが洒落社中（しやれなかま）にひけらかさむとす。」と述べている。その秋成の「洒落社中」が、書名における秋成の二重構造を理解し、秋成の作意を活かすため、わざと版本で二重の書名を用意したし、嘉言もその一人として、挿絵の担当に携わったと考えられる。

注

（1）「癇癖談の成立について」『国語と国文学』（昭和七年七月号）百八頁。

（2）『癇癖談』には段の名称がない。便宜的に『日本古典全書　上田秋成集』（重友毅、朝日新聞社、昭和三十三年）の番号を使うことにする。なお、本稿の『癇癖談』の引用は、『新潮日本古典集成　雨月物語　癇癖談』（浅野三平、新潮社、昭和五十五年）による。傍点筆者。以下同。

(3) 渡辺実、『新潮日本古典集成　伊勢物語』（新潮社）昭和五十一年、六十二頁。以下本稿の『伊勢物語』の引用は、同書による。

(4) この地理的背景については、すでに森田喜郎氏の御指摘がある（「『くせものがたり』について」『日本文学研究』32、昭和四十五年十月）。

(5) 『上田秋成全集』第二（国書刊行会）昭和五十八年、四百八頁。

(6) 「『くせものがたり』の初稿本」『甲南女子短期大学論叢』第一号（一九五六年）四十七頁。

(7) 「癇癖談の成立」『上田秋成の研究』（桜楓社、昭和六十年）四百十五頁。

(8) 「三月廿三日、中はら大兄」あての秋成の書簡で、丸山季夫氏によって紹介された（「『癇癖談』さざめごと」『書物展望』七十八号、昭和十二年十二月号、六十八頁）。

(9) 賀茂百樹、『増訂賀茂真淵全集』第十（吉川弘文館）昭和五年、四百九十五頁。

(10) 「秋成に描かれた人々」（『中村幸彦著述集　第六巻　近世作家作品論』、中央公論社、昭和五十七年所収）

(11) この間の事情を伝えるものとして、大田南畝あての田宮仲宣の書簡が知られている。『一話一言』参照。

(12) 注(6)に同じ。

(13) 『日本古典文学大辞典』第一巻、（岩波書店）百五十四頁。

(14) 中村幸彦編、『日本古典鑑賞講座　第二十四巻　秋成』（角川書店）百六十四頁。

（大学院後期課程学生）